

2023 JUA/EAU Academic Exchange Programme 参加報告

田 口 慧 (東京大)

このたび、JUA/EAU Academic Exchange Programmeにご選出頂き、2023年3月4日～13日の10日間、欧州（ドイツ+イタリア）を短期留学させて頂きました。本プログラムはEAUの年次大会に合わせ例年3月頃に行われますが、ここ数年はコロナ禍のため中止や延期に見舞われており、今回は久しぶりに通常通りの実施となりました。同行させて頂いた名古屋市立大学の内木拓（ないきたく）先生は、実際には2020年に本プログラムへの派遣が内定していましたが、コロナ禍のため3年間 pending になっていたようで、今回こうしてご一緒させて頂いたのはご縁を感じます。

本プログラムは、欧州の2施設を1週間弱かけて視察したあと、EAU年次大会に参加するという構成になっており、今年はドイツのチュービンゲン大学（University of Tübingen）とイタリアのIEO（European Institute of Oncology）を視察したあと、ミラノで開催されたEAU23に参加しました。10日間のプログラムではありますが、毎日分刻みで研修スケジュールが組まれており、正味1カ月分くらいの非常に濃密な体験をすることができました。EAU側にとって我々使節（delegate）はゲスト扱いなので、非常に細かな点まで配慮されており、申し訳なくなるくらいでした。例えば、無料の送迎タクシーで全ての移動をサポートして下さったり、ホテルに到着したらホテル内のレストランで豪華なコース料理が準備されていたり、といった具合です。病院見学の際も現地の医療スタッフは皆、通常業務をしながら我々のことを最優先に考えてくれ、ヨーロッパのホスピタリティの高さを感じました。

もう1つの特筆すべき点は、台湾泌尿器科学会（TUA）のメンバーと同行したことです。普段なかなか関わる機会のない、同年代のアジアの泌尿器科医と多くの時間を共有したことは得難い経験となりました。実際、台湾からの使節の3人は、皆ハイレベルな方達ばかりでした。簡単にご紹介すると、① Dr. Sung（宗・38歳）：PhD-MDコースで基礎研究をやってから臨床医になったという経歴の持ち主で、その豊富な業績から異例の若さですでに准教授になっていました。（台湾では准教授や教授は施設ではなく個人に紐づいた肩書で、一定レベルの業績があると審査を経て認定されるそうです。）Dr. Sungは早ければ来年には教授になれる、と仰っていました。一方、② Dr. Lin（林・37歳）は台湾の最高学府である国立台湾大学卒のエリートで、分野に関わらずとにかく手術が大好きという方でした。地頭がとても良く英語もスマートで、おそらく医者でなくてもどの分野でも成功するだ

ろうなというタイプで非常に刺激を受けました。最後の③ Dr. Chen（陳・31歳）は今回唯一の女性でしたが、父・兄ともに泌尿器科医のサラブレッドで、台湾の若手泌尿器科医の会の副会長をされていました。非常に社交的な方で、率先して現地人への声掛けや交渉を行ってくれたので、滞在中は大いに助けられました。彼ら3人とは、プログラム終了後もお互いに交流を続けようと約束しました。また、毎年8月にTUA年次大会が開催されるそうなので、機会があればぜひ参加したいと思います。

プログラムの内容に戻りますが、チュービンゲン大学（3月4日～7日）では、レチウス温存 RARP の大家である Stenzl 教授の手技を生で見学することができました。（なお、Stenzl 教授は今年、Chapple 会長から代わってEAUの会長にご就任されるそうです。）多くの手術見学のほか、病棟見学や朝カンファへの参加、また基礎の研究所で Aicher 教授の講義を受けることもできました。朝カンファで自己紹介をするように現地で急に言われ、即席で10枚の自己紹介スライドを作って緊張しながら発表したのは良い思い出です。研修以外では、Stenzl 教授の計らいで、シュトゥットガルト（Stuttgart）のメルセデス・ベンツ博物館に行ったり、歴史深いチュービンゲンの町の観光ツアーに参加したり、現地レストランで歓待を受けたりしました（写真1）。

ドイツでの興奮が冷めやらぬまま、3月7日に飛行機でイタリアに飛び、ミラノのIEOで2日間（3月8日～9日）の研修を行いました（写真2）。IEOはヨーロッパ



写真1 チュービンゲン大学の Stenzl 教授と現地のレストランで集合写真（左奥から Dr. Sung, Dr. Chen, 田口, 右奥から内木先生, Stenzl 教授, Dr. Lin）



写真2 IEOのDe Cobelli教授(左)・Musi教授(右)と病院入口で集合写真



写真3 バルセロナ大学のRibal教授(EAUのガイドライン委員長)とEAU会場で再会



写真4 パルマ大学のSebastiano Buti先生とミラノで念願の初対面

屈指の腫瘍専門病院で、毎日多くのロボット手術が行われていたほか、拡張現実(Augmented Reality, AR)の技術を用いて前立腺癌をリアルタイムでマッピングしながら摘除し即座に迅速病理と照らし合わせる前向き研究(AR-Guided RARP)を見ることができました(科長のDe Cobelli教授がご執刀)。また、Musi教授が5cm大の腎癌を無阻血できれいに切除(RAPN)されていたのも印象的でした。アメリカと違い、ヨーロッパのロボット手術導入は日本(2012年)よりも遅い(2015年頃)のですが、すでに多くの臨床エビデンスが生まれている背景には、症例の集約化・効率的な診療・組織力の高さ等があるのだと肌で感じました。

研修終了後は、ミラノに滞在したままEAU23(3月10日~13日)に参加しました。内木先生や台湾の使節の発表を聴きに行ったほか、ESUコース(日本でいう卒後教

育プログラム)が無料で取り放題だったので、Shariat教授によるUTUCの講義や、Rouprêt教授による前立腺癌オリゴ転移の講義、Xylinas教授のNMIBCの講義などを積極的に受講し、知見を深めました。恒例のLive Surgeryでは、私がちょうど1年前に短期留学(2022年2月~3月)させて頂いたバルセロナ大学のAlcaraz教授がラバロ右腎部切をライブ配信されており、非常に懐かしく感じました。同大学のRibal教授(EAUのガイドライン委員長)とは、会場で1年ぶりの再会を果たすことができました(写真3)。

3月12日にはEAU International Friendship Dinnerが開催され、ドレスコードがblack tieのため、人生で初めてタキシードを着て参加しました。会場ではEAUの重鎮の先生方を前に、Chapple会長とStenzl次期会長から壇上で立派な盾を頂くという、大変栄誉な体験をしま

した。その後、JUA 理事長の野々村教授と、日本にご留学経験があり日本語が堪能な EAU アンドロロジー部門会長の Sofikitis 教授と一緒に写真も撮って頂きました（※写真は内木先生の記事を参照）。来年の EAU24 はパリで開催されるとのことで、ぜひ演題を通して参加したいとの思いを強くしました。

上記以外の個人的ニュースとして、2015 年にメールのやり取りで知り合ってからずっと共同研究して来たイタリア・パルマ大学腫瘍内科の Sebastiano Buti 先生と、ミ

ラノ滞在中に念願の初対面を果たすこともできました（写真 4）。

まだまだ書き足りないことが沢山ありますが、誌面の関係でここまでとさせていただきます。最後に、このような貴重な機会を与えて下さった EAU・JUA・TUA の皆様、我々を受け入れて下さったテュービンゲン大学および IEO の皆様、ご推薦頂いた久米春喜教授はじめ忙しい業務の中で快く私を送り出してくれた本学教室員の皆様に、心より御礼申し上げます。